

ECR (European Congress of Radiology 2018)

田上 秀一

ECR2018 に参加しました。ECR は年次開催されるヨーロッパ放射線学会で、例年のごとくウィーンの Austria Vienna Center にて 2 月 28 日～3 月 4 日の会期で開催されました。RSNA に次ぐ世界最大規模の放射線学会であり、参加者は年々増加傾向で、学会からの報告によると、今年は過去最大の約 28,000 人の参加があったようです。発表演題数も EPOS および口演発表がそれぞれ約 3,000 と、やはり大規模な学会です。

例年通り、すべての領域を網羅する如く多くのセッションが組まれています。一般的に演題数の多い腹部領域や神経領域、乳腺領域に加えて、今年は CAD (Computer Aided Diagnosis) や新しい Application に関する演題、レクチャーも多く見受けられ、さらに AI (Artificial Intelligence), Machine Learning に関する最新の自動診断についての演題もちらほら見られました。未だ発展途上とはいえ、今後の AI の診断領域への応用に関する期待（と不安）を抱かせるとともに、放射線領域に関する近年の技術開発進歩を実感する学会ともなりました。

私の発表は “Intra- and extracranial arterial anastomoses: what IRists should know for safe endovascular treatment” というタイトルの EPOS 発表で、頭蓋内・頭頸部領域の血管内治療の際に気をつけるべき頭蓋内外の潜在的な動脈吻合についてのまとめでした。塞栓術の際の頭蓋内外の吻合を介した脳血管への塞栓物質の迷入は、最も注意すべき合併症であり、主に前任地で蓄積した症例とシェーマを使っての解説をする内容でした。例年は EPOS 演題の現地での口演発表は無いのですが、今年からは Voice of EPOS というセッションが設けられ、選ばれた演題は現地で短いプレゼンテーションを行うというものが始まりました。幸か不幸か私の演題も Voice of EPOS に選ばれ、現地で発表してきました。



Voice of EPOS 発表時の様子



ランチタイムの会場エントランス

今年の ECR で最も印象的だったのは、ヨーロッパを襲った強烈な寒波の影響で、非常に寒かったことです。最高気温は-5℃、最低気温は-10℃を楽に下回っており、会場そばを流れ

るドナウ川も氷で覆われるほどでした。観光にも出る気にならない様な凍てつく寒さで、逆に学会場は例年より多くの参加者がいた様に思われました。今回は初参加の家内を連れていたので、極寒のなかでも気合い(?)で観光にも出たのですが、ウィーン市内は写真の様に雪に埋め尽くされた状態です。それでも



雪で覆われたシェーンブルン宮殿

さすがの観光都市、街の中心は多くの観光客で賑わっておりました。

さて、今回の学会参加にはもう一つの目的がありました。2016年の9-12月に短期留学していたスペイン国バレンシアの LaFe 病院を再訪問することでした。飛行機でマドリッドに入り、RENFE というスペイン国鉄で2時間弱でバレンシアに到着します。

バレンシアは地中海沿いに位置する都市で、人口80万人ほどの規模の都市です。温暖な地中海の気候で、到着時の気温はなんと25°C（ウィーンとの温度差30°C以上）です。

私が留学していた当時に、院内の放射線科医とIT技術者と連携して Structured reporting という画像診断レポートのフォーマットの開発を担当していたのですが、その完成形（滞在中は prototype までで終了）と運用方法を確認することが大きな目的です。Structured reporting とは、画像所見をチェックボックスやプルダウンメニューから選んで記入していく方法で、特に欧米の一部の施設ではすでに積極的に取り入れられているものです。ある程度のフォーマット化できる領域であれば、記載の簡略化、見落としを防ぐ、個人間格差の是正、集計の合理化などのいくつかの利点があります。前回留学中にお世話になった Chairman の Prof Luis Marti-Bonmati と IT 技術者の協力が得られ、1日だけでしたが院内の視察と運用の話聞くことができました。今後、こちらでもフォーマットの改良を加えて、我々の施設にも導入が出来ればと思っております。

学会および LaFe 病院訪問と、9日間でややタイトな予定でしたが、無事に目的を終えて帰国いたしました。長い期間の出張を許可頂きました安陪教授をはじめ、サポートを頂きました医局の先生方に深謝いたします。



LaFe 病院での imaging biomarker とその解析 platform を開発する spin-off company “QUIBIM”の CEO と



Prof Luis Marti-Bonmati との昼食